

**平成28年度後期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」**

受賞対象授業名	保育内容演習（造形表現）
曜日・講時	火曜日 5 講時開講
講義コード	3690
授業区分	授業区分①：受講者数が 25 名以上～49 名以下の開講授業
担当者名	矢野 真
所属学部・学科	発達教育学部児童学科

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

保育内容演習（造形表現）では、保育技能に必要とされる子どもの豊かな表現力に対応するために、学生自身が造形を得意・不得意に左右されることなく、自身の感性を育む活動を体験しながら、子どもの感性をどのように育むかということを考える造形活動に取り組みました。

第 2 回～5 回の授業で制作する絵画技法は、事前に用意した縦 13.5×横 18.5 cm の画用紙に様々な技法を行いながら、オリジナルの絵画技法フォーマットに貼り付け、技法や用具の説明・注意点などを自分の手で作り上げていく「表現技法ブック」として、時間外の学習も考慮した制作・提出を行っています。これにより、保育士・幼稚園試験への対策だけでなく、子どもの造形あそびに対する自身の引き出しを増やすことができるような配慮をしています。また、学生が様々な画材を使って表紙を自由に制作することにより、それぞれの個性ある技法ブックとして仕上げていきました。

第 6 回～14 回の授業では、学生が感性を育むために予測ができない課題による発見と驚き（声を視覚化する・触覚を使ってかたちを見る・木材の香りを楽しむ・日常使用しているモノの色から様々なことを知るなど）を体験できるように配慮しました。課題によってはグループ活動を取り入れ、学生間のコミュニケーションを図り、協力して作品づくりを行う体験も取り入れています。

制作中の巡視については、学生の造形等に関する興味も異なるため、自主性をもって授業に参加できるように 27 名の学生一人ひとりへ声掛けを行い、配慮しました。

また、本授業で使用するテキストについても、教員間で内容検討を行っており、教育学科の「保育内容指導法 5」との整合性も図ることにより、よりよい授業内容の検討を行ってきました。

**平成28年度後期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」**

受賞対象授業名	調理学実習Ⅱ
曜日・講時	水曜日 1-3 講時開講
講義コード	3882
授業区分	授業区分①：受講者数が25名以上～49名以下の開講授業
担当者名	樹山 敦子
所属学部・学科	家政学部食物栄養学科

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

調理学実習Ⅱは家政学部食物栄養学科1回生対象の後期開講科目です。前期の調理学実習Ⅰで学ぶ和食調理の基本に引き続き、調理学実習Ⅱでは中華料理と西洋料理の調理を通して、和食とは違う食材の扱い方や盛り付け法を知ることが目的とした内容になっています。また、食物栄養学科は将来管理栄養士・栄養士を目指す学生が学んでいることから、単に調理技術を習得するだけではなく、調理過程で食材の形態・色・味・食感、栄養素がどのように変化するのかについて、「美味しさ」との関係を探求することも目的としています。栄養・食の専門家である管理栄養士を目指す上で、よりよい栄養状態を保つために必要な食事・献立提供をするためには、ある程度の調理技術を身に付けておく必要があります。そのため、多くの管理栄養士養成施設では調理学実習の時間数が削減される傾向にある中でも、本学科では調理学実習は上回生で学ぶ専門科目の基礎として位置付けています。

一方で、調理機会が少ないまま本学科で学ぶ学生の数も増えているのが現状です。調理に対して苦手意識やうまくできないのではと不安に思っている方も多くなっています。そのため、毎回の授業では調理手順の説明だけでなく、食材の特徴や旬について、家庭調理での簡易法、自身が母から習った事やこれまでの失敗談、また失敗を生かす方法など、経験から得た事をできるだけ盛り込んで伝えるようにすることで、調理を身近に感じ楽しいと感じてもらえる雰囲気を作るように心がけています。

今回、実習について評価していただきましたが、私一人では高い評価を得られなかったと思っています。毎回の実習準備、進行をサポートし、また学生が安全快適に実習を行えるように常々実習室および器具類の管理をしてくださっている助手の皆さんが関わっていることだと、最後に書き添えさせていただきます。

**平成28年度後期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」**

受賞対象授業名	英語 I B1
曜日・講時	金曜日 3 講時開講
講義コード	1207
授業区分	授業区分①：受講者数が 25 名以上～49 名以下の開講授業
担当者名	野村 潤
所属学部・学科	文学部外国語準学科

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

【授業の概要】

「英語 IB1」は、一回生必修の言語コミュニケーション科目の一つで、リーディングの授業です。本学の言語コミュニケーション科目では、共通の目標の一つとして「異文化理解」を掲げており、本授業の教材も、異文化間コミュニケーションにまつわる諸問題を扱ったものでした。

【取り組みや工夫】

嫌でも履修せざるを得ない必修英語の授業では、面白い教材と単調にならない工夫が必要です。また、リーディングの授業では、訳語（日本語の単語）の意味をなんとなくつなげただけの解釈に陥らず、単語や文法を確実に処理する能力を身につけてもらうためのしくみも必要です。

毎年試行錯誤をしていますが、まず心がけているのは、配布資料の工夫です。その内容の一つが、本文を日本語で要約（箇条書きで、和訳ではない）し、空欄を設けたものです。予習で空欄を埋め、授業中に確認することで、本文の大意やパラグラフの構造、論理の展開を把握します。しかし、これだけでは意味や文法構造を正確にかつ素早く処理する能力が身につきません。そこで配布資料には、文法的なポイント、イディオムの一部、重要単語などを空欄にした本文（英文）も載せています。この部分に関しては、答えを書き込まずに、音読をしてもらいます。空欄に入る単語が瞬時に思い浮かぶよう練習することで、処理能力の向上を目指します。

授業内容が単調にならないように、本文の理解を深める活動も多用するよう心がけています。異文化の人に対して無意識に持っている固定観念を明らかにするクイズを行ったり、様々なウェブサイトを紹介します。また、2016年度に使用した教科書には、本文の理解を確認する英作文問題が含まれていたため、それにも一定の時間をかけました。英作文は、学習者が自らの弱点を把握し、文法構造やパラグラフ構造に対する意識を高めるのに有効だと考えています。

リーディングの能力を高めるためには、多くの英文に触れることも必要です。本学の必修英語では、eラーニングシステム「ALC NetAcademy 2」（2017年度から新システム「ALC NetAcademy NEXT」に移行）を使用して自習を促し、学習状況や小テストの結果を成績評価に組み入れることで、そのような環境を実現しています。

**平成28年度後期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」**

受賞対象授業名	日本古文書 I B
曜日・講時	木曜日 3 講時開講
講義コード	2887
授業区分	授業区分②：受講者数が 50 名以上～99 名以下の開講授業
担当者名	母利 美和
所属学部・学科	文学部史学科

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

本科目は、史学科 2 回生を対象とした、後期の選択科目である。前期に学修する日本古文書 I A が古代・中世の古文書様式を中心とした講義であるのに対して、古文書で用いられる草書体のくずし字解読の基礎を学ぶことに重点を置いている。くずし字の学修は、漢字や仮名のくずし字など、時代による筆法の違いや、個人の筆跡の違いのみならず、同じ文字の異なるくずし字などがあり、多くの解読経験により積み重ねていかなければ修得できないものであり、短期間での基礎修得は困難である。

くずし字の学修は、漢字の構成要素、つまり漢字は偏旁冠脚などの部首と旁（つくり）から成っており、まず個々の部首・旁がくずし字としてどのように表されるかを覚えることが、修得の近道である。そのため本授業では、まず日常に用いている「平かな」がすべて漢字の草書体であることを具体的に例示することにより学生に伝え、興味関心と、身近さを理解させ導入としている。その上で、とくに留意していることは、以下の 3 点である。

- ① 仮名文字（平かな・変体かな）のくずし字を徹底的に修得することが、古文書解読の基礎となるので、仮名文字のくずし字一覧を配布し、具体的な筆跡事例を解説しながら覚えさせ、第 2 回目から小テストを数度繰り返し、全員が 80% 以上解読できるようにしている。
- ② 漢字のくずし字に進む段階では、初歩的な行書体、近世で典型的な公文書で用いられる御家流の史料を教材にし、段階的に難易度レベルをあげながら、武家・町・村・寺社の古文書などを利用し、様々なパターンの文字を解読する。読み間違いやすく、似たくずし字がある場合は、その都度、他の文字の事例を紹介し、合わせて覚えるように指導し、単語カードなどで整理し、日常的に復習するよう勧めている。
- ③ 選択科目とはいえ大人数の授業であるので、できるだけ学生の理解度を確認するため、中間テストをおこなったり、常時学生と対話し、反応を確認しながらすすめている。

この授業は全体的に受講生の学習意欲は高く、博物館などの古文書の展示が少しでも読めるようになる感覚は、学修が進んでいる実感をもてることに繋がっている。授業の方法は、これまでと大きく変わったわけではないが、①の学修を徹底させたことや、②の対話を増やし、その都度学生の反応を確認したことが、学生にとっても学修しやすく、学修効果が実感できるものにつながり、全体的に高い評価となったと考えられる。学習意欲が持続しない学生への対応については、授業中での復習度合いの確認などの指導を丁寧におこなうことで、今後も改善につとめたい。

**平成28年度後期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」**

受賞対象授業名	対人社会心理学
曜日・講時	木曜日 3 講時開講
講義コード	3408
授業区分	授業区分②：受講者数が 50 名以上～99 名以下の開講授業
担当者名	吉村 英
所属学部・学科	発達教育学部教育学科

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

この授業では、知識を記憶するのではなく、ものの見方や考え方を身に付けていただくことを目標としています。そのため講義科目ではありますが、一方的に話をするのではなく、ディスカッションやディベートの時間を設けたり、実験や調査を自ら体験していただくことによって、理解がより深まるよう工夫しています。

あるときは、授業の最初に意見が分かれるようなトピックスを取り上げ、自分はどちらの意見に近いか選んでもらいます。たとえば自分と似たような人を好きになる（類似説）のか、それとも自分にはないものを持っている人を好きになる（相補説）のかについて、支持する説を選択します。そしてその理由をまず自分一人で考え書いてもらいます。次に 6～7 人のグループに分かれ、それぞれの意見を交換します。すると自分では思いもつかなかったような意見や理由が出てきて視野が広がってきます。ときにはそのテーマでグループ対抗のディベートを行います。その時どちらの立場になっても相手の説を論破できるように準備をしてもらいます。つまり自分とは異なる意見についても、それを支持するような根拠をあえて考えてもらいます。これによって1つの問題を複数の視点から検討する習慣が身につきます。これだけでも素晴らしいと思いますが、時にはディベートの中でそれらの視点を統合するような新しい視点が生まれることもあります。大げさに言えばヘーゲルの正・反・合を彷彿させるようなことも起こります。

またある授業では、学生さん自身が質問紙に回答し、クラス全体の集計を行います。その後その質問紙を用いた先行研究をいくつか紹介し、先行研究の結果と自分たちの結果を比較してもらいます。自分が経験することで先行研究の意味や内容をより深く理解することができるようです。また自分自身の結果を、クラス全体の結果や先行研究の結果と比較することにより、自分自身についてじっくりと考え直す機会にもなるようです。

この他にも大勢でできる実験を試みたり、思考実験を試みたりと色々と工夫をしていますが、まだまだ工夫の余地はあると思います。これからもさらに工夫を重ね、楽しくわかりやすい授業を目指してゆきたいと思っています。

**平成28年度後期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」**

受賞対象授業名	指揮法 I
曜日・講時	木曜日 5 講時開講
講義コード	3509
授業区分	授業区分②：受講者数が 50 名以上～99 名以下の開講授業
担当者名	安村 好弘
所属学部・学科	発達教育学部教育学科

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

指揮法 I は、音楽教育学専攻の専門科目と同時に教職免許取得必修科目でもある。音楽教育学専攻生（2 回生）と他専攻生が履修している。指揮は、独奏、独唱とは違い、多くの人の前で指揮するので、恥ずかしがることなく、技術は勿論のこと、的確な指導能力が求められる。3,4 回生での教育実習期間中では、合唱の指導をすることが多く、またクラブ活動では吹奏楽、オーケストラの指導を行うこともある。中学、高校時代では音楽の先生の指揮の下で、歌ったり楽器を演奏したり、実際の経験を積んできている。今度は指導する立場になるので、技術と指導能力が問われる。授業では、指揮の基礎技術、スコアリーディング、指導方法を中心に実践した。具体的には、ソナチネアルバム 1 巻を使い、一人がピアノを弾き一人が指揮を行った。受講人数が多いが、全員にピアノを弾かせ、指揮をさせ、その後、簡単にコメントをつけた。半期なので、一人 5 曲位しか実践できないので、他人が振るのを見て自分との違いも分かったことと思う。全員にピアノを弾かせたので、指揮者との駆け引きも理解できたと思う。指揮の技術は実技と同じく練習しないと直ぐには身につかない。指揮者は演奏時に、作曲者の意図やねらいを伝えるために、事前にしっかりと譜読みをし、質問があれば的確に質問に対して応えなければならない。

一人が指揮する時間は少ないが、他の人の指揮を見たり、解説やコメントを聞いたり、ピアノ伴奏したりすることで、指揮の必要性が掴めたことと思う。機会があれば、現場での実践を通して自分の力を試してほしい。

**平成28年度後期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」**

受賞対象授業名	組織マネジメント論
曜日・講時	水曜日 1 講時開講
講義コード	4630
授業区分	授業区分③：受講者数が 100 名以上の開講授業
担当者名	西尾久美子
所属学部・学科	現代社会学部現代社会学科

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

組織マネジメント論（現代社会学部向け開講）では、私たちの身近にある組織のマネジメントについて、理論を知り理解するだけでなく、学んだ理論を用いて具体的な事例について分析できる力も高めることも目標としています。そのため、外部から複数のゲストスピーカー（企業経営者や組織運営管理者）を招き、組織を取り巻く環境の変化について、よりヴィヴィットな情報を授業に取り入れて、15回の授業を進めるようにスケジュールも組み立てています。

また、ゲストスピーカーの講義時間は 60 分程度とし、講話のあとで私がお話を理論的に分析し、具体的な事例と組織論の理論とを結び付けると、どのような考察が導けるのかを示しています。

授業の目標を実現し、130 名程度の受講者にアクティブラーニングを取り入れた授業を進めるために、以下のような取り組みをしています。

・予習に関して

テキストを事前に読み下調べをした上で出席することを履修者がより実践しやすいように、テキストのポイントをまとめた配布資料を作成し、授業開始時期にすべてをwebにアップし、配布資料を参照しながら組織論に関するテキストを読み進められるように工夫しています。

さらに、授業で取り上げる事例や、外部のゲストスピーカーの企業や組織については事前にアナウンス（参考になるURLなども提示し）し、取り上げる組織の運営の概要について調べたうえで授業に出席するように促しています。また、事例はテキストで紹介されるどの理論との関連が深いのかについても事前に紹介し、履修者が予習に対して能動的に取り組むようにしています。

・復習に関して

毎回の授業の終わりに、この日に学んだ理論を実際の企業や組織の事例にあてはめて、事実を整理したうえで自分なりの考察をまとめる、ミニレポートし提出してもらっています。また、ゲストスピーカーを招いた講義のおりには、事後レポート（課題は事前にゲストスピーカーと相談し、単なる感想文にならないように理論を用いて考察するように工夫）をwebに提出することも行っています。

・振り返りに関して

提出されたミニレポートの講評については、翌週の授業で行います。また、上記のレポートの翌週の授業で、レポートの内容（匿名）を紹介し、履修者の意見を授業に取り入れるように工夫もしています。

今後は、学生のみなさんからのアンケート結果も活かして、理論と実際とのつながりを意識できる授業を目指し、さらに工夫を重ねていきたいと思っています。

平成28年度後期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」

受賞対象授業名	認知言語学
曜日・講時	金曜日 4 講時開講
講義コード	2673
授業区分	授業区分③：受講者数が 100 名以上の開講授業
担当者名	石田 秀雄
所属学部・学科	文学部英文学科

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

この授業では、プロトタイプによるカテゴリー化、イメージスキーマ、メタファー、メトニミー、シネクドキなどの認知言語学で扱われる基礎的な概念を、英語と日本語の例を挙げながら解説するとともに、英語の前置詞と冠詞を取り上げ、認知言語学の視点から応用を試みました。オープン科目であるため他学部・他学科からの受講生もおおり、全体で 100 名を超えていたことから、授業は講義形式で行ないました。

授業に際して特段工夫をしたことはありませんが、「英語的なものの見方」という認知に関わる問題を扱うため、図や画像を多数用いて視覚に訴えることで、受講者が直感的に理解できるように心掛けました。また、英語や日本語の具体例は可能なかぎり卑近なものを取り上げました。さらに、毎回授業の初めにその日に学習する内容に関わる簡単な質問を印刷した用紙（A5 の大きさで出席票にもなっています）を配布し、受講者が持っている言語知識や言語感覚の活性化を図るように努めました。学生の解答の中には興味深い視点を示すものもあり、そうした例はその次の授業で紹介し、コメントを加えました。基本的には、認知言語学のように講義内容に対して学生の関心を持たせやすい科目は、提示の仕方さえ間違わなければ、それなりにしっかりと聞いてもらえます。

全体としては、講義形式であるため、受講者はどうしても授業時間外における自学自習への取り組みが不足する傾向にあります。その辺りは改善の余地があると思っています。

平成28年度後期 京都女子大学『学生アンケートによる優秀授業賞』
「授業紹介シート」

受賞対象授業名	心理学アプローチ
曜日・講時	木曜日 2 講時開講
講義コード	4497
授業区分	授業区分③：受講者数が 100 名以上の開講授業
担当者名	正木 大貴
所属学部・学科	現代社会学部現代社会学科

今回受賞対象となられた授業について、その取り組みや工夫などについて、ご紹介ください。

「心理学アプローチ」という科目は、主に 1 回生を対象にして、心理学の基礎的な知識や考え方を学ぶ選択必修科目です。現代社会学部は学ぶことができる分野が多岐にわたっているため、学生たちはこのアプローチ科目を通じて、自分が興味ある分野を見きわめていく必要があります。そのことを踏まえて、授業を構成するうえで注意している点は以下の 3 つです。

① 「体験する」

100 人以上でも可能な心理学の実験を授業内で実際に行うことで、過去の心理学の知見といま自分たちの行動傾向や“心の動き”を比べながら検証してもらいます。ただ講義を聴くよりも、授業に参加している感覚を持てるようにしています。

② 「気づく」

日常生活に心理学という学問が密接に関わっていることに気づいてもらえるように、常に身近な例を出しながら説明しています。普段意識はしていないけれど、こんなことも心理学で説明できるのか！と思ってもらえるように心がけています。

③ 「活用する」

学んだ心理学の知識は単位を取るためのものではなく、「今の私はどんな人なのか」を理解するために利用してもらえるように、また心理学のものの考え方を「これから私は何がしていきたいのか」を考えるために活用してもらえるよう促しています。